

フルスイング

〔登場人物表〕

葉木 勇氣 (17) (27) 配達員

照井 鏡子 (56) ガソリンスタンド店員

配達員 1 (22)

配達員 2 (30)

野球部監督の声

○甲子園球場・マウンド

大歓声の中、葉木勇気（17）がピッチャー・マウンドに立っている。脂汗がだらだらと止まらない。

○同・スタンド

高校生たちが大声で応援している。電光掲示板には、9回裏、ツーアウトスリーボールの表示。『一球入魂』と書かれた横断幕がなびいている。

○同・マウンド

フラフラで目も虚ろな葉木。野球帽を外すと、つばの裏には『一球入魂』とマジックで書かれている。

野球部監督の声「一球入魂だ！葉木！」

野球帽を被り直し、思いっきり投げる葉木。カキン、と音がして青空にボールが吸い込まれていく。バタリ、とマウンドに倒れる葉木。

野球部監督の声「おい！大丈夫か：！」  
スタンドからはどよめきと笑い声。

○パンダ急便・営業所・外観

テロップ「10年後」  
「パンダ急便」と看板が出ている。段  
ボールをバンに積む葉木（27）と複  
数人の配達員たち。

○配達バン・車内

葉木が運転している。荷台には大量に  
荷物が積まれている。信号で止まり、  
メーターを見るとガソリンメーターが  
赤く点滅している。葉木、腕時計を見  
て、信号を曲がる。

○ガソリンスタンド『エネルギー』・外観

数人の店員が働いている。

○同・敷地内

葉木の配達バンがガソリンスタンド内に入ろうとする。グレーのロングヘアの照井鏡子（56）が気づき、駆け足でバンに近づく。

鏡子「オーライ、オーライ、オーライ。はい、ストップです」

鏡子が運転席に近づき、葉木が窓を開ける。鏡子が被っている制服のオレンジのキャップ帽を脱いで一礼する。鏡子のキャップ帽のつば裏に何か書かれているのがちらと見える。

鏡子「いらっしやいませ。レギュラー満タンで？」

葉木「はい。お願いします」

鏡子「承知しましたっ。ゴミ、ありますか？」  
鏡子、笑いながらキャップ帽を被り直す。

× × ×

鏡子が運転席の窓をノックし、葉木が窓を開ける。

鏡子「3900円です」

葉木、自分の頭を指差し、

葉木「それ、なんて書いてあるんですか？」

鏡子「あ、これですか」

鏡子、キャップ帽を脱ぎ、つばの裏を

葉木に見せる。「自分次第」と書かれている。

鏡子「ほら、高校球児がよく書いてるでし

よ。真似」

配達バンの外側に『配達員…内

藤勇氣』の看板を見つける鏡子。

鏡子「葉木：：葉木投手!? 青森玉田の？」

葉木「え、あ、はい。そうですけど」

鏡子「わく！本物!? 私！ファン！」

鏡子自分を指差す。

葉木「ファン？」

鏡子「私、高校野球ファンなのですよ！葉木

投手ってことは、君今いくつ？」

葉木「27つす」

鏡子「えく！てことはあれから10年か！変

わらないねえく」

運転席の窓の外から身を乗り出し、葉木の肩をバンバン叩く鏡子。

鏡子「お、あのときの鬼肩も健在だねえ〜」

葉木「健在じゃないですよ」

鏡子「なに言ってる：」

葉木「健在じゃないです!!」

葉木が配達トラックで走り出す。

鏡子「また、お待ちしてまーす」

○パンダ急便・営業所・中

葉木が入ってくる。配達員2人が話を止める。

配達員1「葉木さん！昔、甲子園出てたって

本当ですか？」

配達員2「おい！」

葉木、2人を一瞥して口ツカールームに行く。

配達員2「まじやめろって」

配達員1「だって、これ葉木さんすよね？」

配達員1がスマホで動画を見せる。動

画内では、うれしそうに1塁から2塁へ走り回る選手。突然、動画が揺れる。ピッチャーマウンドで高校時代の葉木が、ユニフォーム姿で倒れている。実況の声「葉木！葉木が倒れました！」

○ガソリンスタンド『エネルギー』・外

葉木が営業所から手を拭きながら出てくる。鏡子が笑って声を掛ける。

鏡子「間に合いました？」

葉木「間に合ってます」

鏡子「また葉木投手に会えるなんて」

葉木「あの……なんでまだ覚えてるんですか？10年前ですよ？」

鏡子「倒れるまで投げたのあんたしかいないじゃない。覚えてるよ」

葉木「今はもう投げられないです」

鏡子「怪我したんだっけ？」

葉木「投げられない自分には、もうなんの価値もないです。怪我でもないのに、あの

時のことを思い出すと、手が震えるんです」

葉木、震える右手を見つめている。

葉木「僕は、俺は、もう投げられない……」

鏡子、キャップ帽を外し、

鏡子「投げてた人が打つこともある。それが

野球のおもしろいところじゃないの？」

葉木、顔を上げる。

鏡子「ほら」

鏡子、キャップ帽のつば裏を見せる。

『自分次第』と書かれている。

○パンダ急便・外観

雨が降っている。

○同・営業所・ロッカールーム

葉木と配達員1が掴み合いの喧嘩をし

ている。配達員2が2人を引き離す。

配達員2「おい！やめろ！」

配達員1「本当のこと言えって言われたから

言っただけです！葉木さん、配達しよつち

ゆう間違えるし、遅いし、だから他の人が  
葉木さんの分までやんなきゃなんない  
し！」

葉木「あそのこの地域はすぐに再配達を頼んで  
くるおばあちゃんがいるんだ」

配達員1「もう運送辞めたらいいですよ」

葉木「確かに迷惑掛けてることは認める。で  
も、また辞めたくない。投げられないから  
って打てないと思いたくないんだ」

配達員1「甘えたこと言わないでくださいよ。  
せめて、100個。やってくんないと迷惑  
なんです！」

葉木「わかった」

配達員1が、止まる。

葉木「100だな。100。やってやる」

配達員2の腕を振り払って、ロツカー  
ルームから出ていく葉木。

## ○住宅街・道

雨の中、葉木が走り、荷物を玄関まで

運ぶ。

○マンション・階段（夕）

葉木が走りながら、荷物を運ぶ。

○バッテリーセンター・中（夜）

雨の中、葉木が何度もフルスイングしている。

○ガソリンスタンド『エネルギー』・外（夜）

鏡子が働いている。

○同・敷地内（夜）

葉木が走ってやってくる。

葉木「あの！」

洗車中の鏡子が振り返って、

鏡子「葉木投手！」

ぼろぼろの葉木が鏡子に近づき、

葉木「打ってきました」

鏡子「うん？」

葉木「あれからずっと、投げられなくなつてからずっと、気づいたら、普段の生活でも全力で返せなくなつて。俺、野球選手でもないし、会社員としてもなにもできないつて思つてたけど」

鏡子「打つたんだ」

葉木「はい」

葉木が振り返ると、荷台が空っぽの配達トラックがある。鏡子、キャップ帽を脱ぎ、葉木に渡し、

鏡子「なんか書いてよ。門出を祝つて」

葉木、キャップ帽に書き込む。

葉木「これで」

葉木が鏡子にキャップ帽を渡すと、つばの裏に『自分次第』の上に、『フルスイング』と書かれている。葉木が笑顔でフルスイングのジェスチャーをする。